一九六八年（掲載誌、発行元不明）

差の根底にある古い人間観

日本生産性本部プログラム教育研究所
矢口　新

一、能力差について

能力の差というのがよくないことばだ。能力にはいろいろ違ったものがあるが、それは差ということばであらわせないと思う。人間を、そんなに簡単に差をつけて考えないほうがよいと思う。

差というような考え方をする根底には、きわめて古い人間観があるようだ。また極めてそぼくな考え方であるようだ。テストをして点をつけて、その点の差が能力の差だと考えるような考え方があるのだろう。人間がどういうことができるかをみるのは、なかなかむずかしい。人によってそれぞれ独自の能力ができあがっているので、簡単に差をつけるというのはよくないことである。そんな比較をするという考え方でなく、一つ一つのすがたをつかむことを考えたらよい。芸術品とおもえばよい。

二、ひとりひとりの能力のすがたを

ひとりひとりのやること、することにちがいがあるのは確かだから、それをよく見ることがたいせつなことはだれも知っている。しかしそれができないというのが現実だということも確かである。人数が多すぎるので見る余裕がないということもある。

しかしかりに二十人くらいの人間になったら、ひとりひとりのすがたが見えるであろうか。私はそうは思わない。ひとりかふたりならばいちばんよいなどということになるのではないか。

ひとりひとりの能力のすがたをみるには、そういう方法を考え出さなくてはならない。

その方法の根本は何かといえば、何ができるのかをみるということである。何が言えるのか、何が書けるのかではない、それはテストである。何ができるのかである。

それから先は、教師がみずから発見しなくてはならない。私が書いても、能力をみることができるようにはならないのである。